



多様な視点に基づく未来知で 社会に貢献 ～金沢大学の入試改革～

谷内 通 金沢大学
Tohru TANIUCHI

森本章治 金沢大学
Akiharu MORIMOTO

和田隆志 金沢大学
Takashi WADA



谷内 通



森本章治



和田隆志

はじめに

金沢大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念としている。この理念に立脚しつつ、進むべき指針を示すため、2022年に未来ビジョン『志』^{こころざし}を公表し、2024年には改訂版を策定した。『志』の目標は、「地域と世界の2つの視点を往還させながら、未来の課題を探究し克服する知恵「未来知」により社会貢献を果たすこと」である。

ジェンダード・イノベーションに代表されるように、課題解決のために視点の違いを活かす取り組みが一般的になってきている。金沢大学においても、金沢大学ダイバーシティ推進基本理念¹⁾に基づいて、様々な取り組みを行ってきた。本稿では、そのような取り組みの中から入試改革、特に2023年度から導入した理工学域女子枠特別入試について紹介したい。

金沢大学の入試改革

金沢大学は入試制度の改善に取り組んできたが、2020年度実施の入試から大きな改革を開始した。一般選抜では後期日程を廃止して前期日程のみとすることで、金沢大学を第一志望とする志願者の受け入れを拡大した。また、調査書に対する「主体性評価」を行い、部活動や委員会活動、留学やボランティア活動、学外での学習等の多様な活動を入試の評価に取り入れた。

さらに、金沢大学が主催する2つのコンテストの受賞者を対象とした超然特別入試^{ちょうぜん}も開始した。日本数学A-lympiadは、数学の力で社会問題の解決策を提案するコンテストであり、上位の表彰チームをオランダで開催される世界大会に派遣している。超然文学賞は小説部門と短歌部門からなるコンテストであり、プロの小説家や歌人を加えた委員による審査を行い、表彰作品を冊子として刊行している。超然特別入試では、これらのコンテストにおける入賞者を、特異な才能と熱意を持つ志願者として受け入れることで、教育研究環境における多様性を拡大することを企図している。

一方、KUGS 特別入試（KUGS: Kanazawa University “Global” Standard²⁾）では、高大接続プログラムの修了による受験資格に基づいて、口述試験を重視した選抜を行っている。大学の講義を受けて作成する「大学での学び」と高校での活動と成長を振り返る「高校での学び」のレポートを提出し、最終的に基準を満たすと受験資格が与えられる。2025年度実施の入試からは、科目等履修生として金沢大学の授業の単位を取得することでも受験資格が得られるようになる。また、小学生から高校生までの科学研究を支援する金沢大学 STELLA プログラム³⁾において所定の段階までを修了した生徒にも受験資格が与えられる。

理工学域女子枠特別入試

金沢大学は、様々な個性を持つ学生や教職員が能力を発揮することのできる環境の構築を目指してきた。ジェンダーバランスについては、役員における女性比率の向上や女性教員の採用を進めてきた。これらの取り組みを通じて、理工系における女性教員の比率は増加傾向にはあるものの、低い水準から脱することができない状況が続いてきた。多くの大学が女性教員の採用を積極的に行っている状況下では、採用方法の工夫だけでは根本的な問題解決にはつながらないとの認識に基づき、理工系における女子学生の育成から取り組むため、2023年度実施の2024年度入学者選抜から理工学域女子枠特別入試を開始した。検討の当初は、「一般選抜で良いのではないか」、「ジェンダーに関する複雑な問題が生じないか」といった意見もあったが、大学や日本の競争力強化のためには理工系における女性の活躍が必須であること等の議論を通じて、女子枠特別入試の導入を進めることとなった。

理工学域は旧理学部と旧工学部を統合した学部であり、数物科学類、物質化学類、機械工学類、フロンティア工学類、電子情報通信学類、地球社会基盤学類、生命理工学類の7学類がある。物質化学類と生命理工学類では女子学生比率がおおむね30%以上を維持して

いたこともあり、女子学生比率が低い水準にあったほかの5学類から開始することになった。初年度の募集人員は全体で34名であった。3~5名の募集人員を設ける学類が多い中で、機械工学類が20名という思い切った募集人員を提案した。一般選抜の募集人員が減少する影響を心配する声もあったが、「少人数の募集では、入学後に女子学生の仲間が少ないのではないか」という受験生の不安を払拭できない」とする意見には説得力があった。理工学域全体での募集人員は、初年度の34名から翌年には38名に増え、2025年度実施の入試では44名とすることを予告している。

説明会には父母等も参加可能で、女性教員や学生との交流や施設見学を通じて、理工学域の学びを実感できる機会としている。出願は11月初旬で入学手続きが一般選抜前期日程の前となるため、金沢大学を第一志望とする意欲ある志願者のみが対象となる。入試では大学入学共通テストにより基礎学力を評価するが、総点の1/3~1/2を占める口述試験により、能力・資質を多角的、かつ厳格に評価することを重視している。

女子枠特別入試を初めて実施した5学類の入学生における女子学生比率は、約10%から15%に増加した。女子枠特別入試以外の入試でも女子学生が増えたこともあり、理工学域全入学者で見ても、女子学生比率は約16%から20%へと増加した。理工学域にとどまらず、全学的な好影響も見られ、2024年度には学士課程全体の在籍者数における女子学生比率が初めて40%を超えた。今後、募集人員の見直しや学年進行により、理工学域における女子学生比率はさらに増加する見込みである。

女子枠特別入試の評価と課題

女子枠特別入試の最初の入学者が2025年度に2年次になるところであり、入学者の質や波及効果については今後の検証が必要な段階である。これを前提とした上で、関係教員等からは、次のような意見が得られている。「女子枠の説明会の参加者は積極的で、多くの質問が寄せられる」、「女子学生のまとまりが良く、一緒に勉強している」、「女性の教員や先輩と集まって、授業や進路について相談している」、「授業に集中している」、「成績も良好で、問題を抱えた学生は生じていない」、「モチベーションの高い学生が集まり、互いに高め合う雰囲気を感じられる」、「助言により成績が大きく伸びた。成長できる人物を入試で見極められている」、「やる気のある男子学生には良い刺激になっていると感じる」。また、入学者からも「女子同士で切磋琢磨して、楽しく勉学に励んでいる。女子枠に挑戦して

良かった」との声も聞かれた。教員が企業と関わる際にも、女子枠特別入試が話題に出ることや、人材への期待を感じる人が多いとの報告もあった。

ダイバーシティ推進の取り組みについては、金沢大学ステークホルダー協議会⁴⁾のテーマとして毎年取り上げており、女子枠特別入試についても肯定的な評価をいただいている。今後の検証では、成績だけでなく、授業の活性化や視点の違いを活かした教育効果、イノベーションへの寄与、進路に関する評価も必要であり、指標の検討も併せて進めていく必要がある。

一方で、女子枠特別入試を含む特別選抜については、「一般選抜よりも簡単に入学できる」等の誤解を危惧する声もある。IRによる客観的な指標を可能な範囲で公表することや制度の周知により、正しい理解を学内外に浸透させる必要がある。また、募集人員に対する志願者数が必ずしも多くないことは今後の課題である。各大学が多様な入試を実施していることもあり、特別選抜が地元以外で認識されるためには一定の期間が必要である。女子枠特別入試についても、入学者が活躍する様子等の発信を通じて、魅力のある入試制度としての認知度をさらに高めていく必要がある。

おわりに

理工学域における女子枠特別入試は、ジェンダーバランスへの対応という限定的な意味ではなく、「多様な視点と能力を結集した未来知により社会の課題に挑戦する」という金沢大学の目標に向けて、国際化や異分野融合も含めて、多様な人材が切磋琢磨する環境を創出するための方策の1つとして位置づけている。長期的な効果については、今後の検証を待たなければならないが、現時点では良好な評価を得ている。理工系の女子学生を増やすだけでなく、多様な視点や能力を教育や研究に積極的に活かすための方策に関するFD活動等を併せて行っていくことが必要である。女子枠特別入試を含めた入試改革や多様性を活かす学内環境の整備を実行していくことで、一層発展する大学であるための挑戦を続けていく。

- 1) <https://ipdi.w3.kanazawa-u.ac.jp/message/kikou>
- 2) <https://www.kanazawa-u.ac.jp/university/corporation/program/global/>
- 3) <https://kustella.w3.kanazawa-u.ac.jp/>
- 4) <https://www.kanazawa-u.ac.jp/university/administration/stakeholder/>

© 2025 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp